地誌研年報7号, 1998年3月
ANREG 7, March1998

総合討論

Discussion

岡橋秀典（座長；広島大学文学部）：今回は事前にいくつかの課題を出させていただいて，4名の先生方にはそれについて既にお答えいただいたように思う。その意味では，発表をお伺いして既にだいたいの方向は出ている。しかし，まだ若干突き合わしていくことが必要な点もあるし，また異なる意見をお持ちの方もおられると思うので，若干議論をさせていただきたい。

問題は2つあるかと思う。その1つは国際学術研究で海外地域調査をする際の実際的な問題である。例えば，ビザの取得や共同調査の実施方法，地図の入手などといった実際的な諸問題である。もう1つは，地理学において海外地域研究はどうあるべきかという問題である。言い換えれば，地理学の独自の手法は何なのか，地理学の手法の有効性は何か，さらに，若干次元は異なるが，地誌研究にはいかなる意義があるのか，可能性があるのか，という問題にも関わってくる。

そこで，まず地理学における海外地域研究のあり方，その有効性・独自性といった問題を議論したい。他分野の方々はそれぞれ専門テーマを持っており，それらが意義ある研究であることはいうまでもないが，それらの多くがわれわれの希望に叶っているかといえば，必ずしもそうとはいえない。簡単にいえば「地域が見えてこない」といえる。地理学の役割について，高橋先生からは，空間的な分析の有効性（特に地図化の有効性）や複合的な分析視角の重要性が指摘された。石原先生は，自然地理的な環境をふまえた生態学的な見方と地域論あるいは空間構造論的な見方の2つが地理学として独自のものではなかろうかと指摘された。また，藤原先生は，石原先生らの考え方に加えて，標本調査の対象地域の選択方法や，そこでの事例をもとに一般化するときの地理学的な発想が大事なことや，専門分野の研究では基礎作業としての役割も否定できないことが指摘された。寺阪先生は，海外地域調査では国内調査の経験を活かすこと，国内調査の延長とみるべきことを指摘された。地理学固有の方法にもそれぞれの研究者で得意・不得意があるので，「地理学はすべてこうであるから，私は海外調査においてはどれでもできる。」というのはなかなか難しい。しかし，何かそのような手法をふまえながら海外地域研究に活かしていくことは当然考えられるし，またあるべきだと思われる。以上のようなご意見を，地理学の有効な点として出していただいた。

そこで，フロアの皆さんからも，これまでの海外調査の経験をふまえて意見を述べていただきたい。

中山修一(広島大学国際協力研究科)：岡橋先生のまとめを聞いていて，非常に大事な問題提起をされたことに気づいた。それは「海外調査と地理学の意義」についてだ。地理学の分野では，この問題について1968年の経済地理学会で一度議論したことがあるが，結論は出なかった。地理学で海外地域調査を行った場合に，最終的に普遍的原理を目指すのか，その地域の固有な原理を目指すのかという議論に対し，地理学はその両論でいくべきだという結論になってしまった。その意味では，それから30年後の今日，この場で今一度，「海外地域研究の成果を地理学の発展にどう活かすか」というテーマを取り上げたのは，大きな意義があることだと思う。調査の視点に関わることは，岡橋先生のまとめでほぼ出尽くしているように思われる。地理学における有効性はかなりまとまっており，30年の成果をふまえて提言できるものに行き着くという期待感が出てきた。海外地域調査が地理学として何をどこまで目指すべきかを，本シンポジウムで整理しておくことは大きな意味がある。

もう１点は，海外地域研究のタイトルに，寺阪先生の場合には常に「地理」という文字が入っていることだ。先生のこれまでの調査において，常に「地理」にこだわるタイトルに，私は非常に感銘する。広島大学の場合には，「地理」という言葉を入れたり入れなかったりしている。結局，地理学と海外調査とを考える場合に，地理という言葉をタイトルに入れておくのが長い目でみると，他の分野や関連分野の人にイメージを与えることになるとも思われる。そこで，石原先生の海外調査では地理学者がメインでありながら「地理」という言葉を除いた理由を私は先ほど質問した。他分野の人を含めた以前の調査には「地理」という名称が入っているのに，地理学者ばかり集まったときに「地理」という言葉を入れずに，「生活空間」となっている。このようなかたちで関連分野の人たちに地理学の調査の方法を示すべきか，中身で勝負すべきかについて私自身は迷っているが，寺阪先生の意図も今一度お聞きしたい。何かポリシーがあるのか。

岡橋：中山先生が今指摘されたとおり，前回のシンポジウム（地誌研年報５号に掲載）での中山先生の発表のなかで，このことが指摘されているのを思い出す。1968年に，「海外地域研究の成果と方法」という大きなテーマで，今日のテーマと重なるかたちのシンポジウムが開催されており，そのなかで「何を目指すべきか」が議論された。これは調査の視点とも関わってくるが，その目指す方向は確かに今回は正面切って議論されておらず，これは今後深めていきたいと思う。

もう１つは，先ほどの石原先生の発表のなかで質問されたことだが，海外地域研究のタイトルの問題である。これは実際に文部省への申請時に深く考える問題だが，他分野の人に理解してもらえるにはどうしたらよいか，ということを普通は真っ先に考える。すると，まずは申請が採択されやすいテーマということになり，そのときに地理学をつけるかどうか非常に迷うことになる。ただ，中山先生の指摘は別の意味で，新しく作られた成果が長い目でみてどういうように評価されるかという問題と関わっているわけだ。ひとたびその成果報告書に「地理学からのアプローチ」あるいは「○○の地理学的研究」とつくかどうかは，あとの評価やその学問分野の存立基盤という面にも関わってくるような問題だというご指摘かと思う。つまり，たかがタイトルとは言えない部分が若干あるのではないかと思う。そこで，タイトルにずっと「地理学」を入れてきたという寺阪先生のグループは，どういう意図があったのかという事情を教えていただきたい。

寺阪昭信（流通経済大学経済学部）：深い意味はないといえばないし，あるといえばある。１つには，われわれのグループは非常にマイナーなので，どういうかたちで申請をしたら採択されやすいか，という「戦略」があった。このような発言は若干誤解を招くかもしれないが，地理学に限らず，科研費一般の配分は，やはり旧帝国大学系が圧倒的に多いわけである。マイナーな所属の場合には，タイトルの善し悪しというのはかなり影響するだろうと考えた。加えて，海外調査の審査員に地理の専門家が関わっているのは非常に少ないと思われる。その場合に，所属・方向をはっきりさせるためには地理学的研究という名前が入っているほうが分かりわかりやすいだろうと考えて，ずっと続けている。広島大学のインド調査などは長く続けられており，私からみれば非常に恵まれた立場だと思う。東京都立大学の場合でも，今は海外調査が非常に増加しているが，そのような主流から外れた場合には，今日でも非常に通りにくいと思う。そうしたなかで10年近く続けられた私の場合には，非常に幸運だと思っているが，いつも通っているわけではない。その点では，いかにして科研費の申請を通すかという戦略からタイトルを決めている部分があるといえる。それと同時に，1968年のシンポジウムの話について一言いわせてもらうと，1960年代に調査してきたグループは，圧倒的に東京大学地理学教室の人達が中心だったように思える。その場合のタイトルは，かなり大まかなものだった。それが1980年代以降海外調査が増えてきたなかで，タイトルも非常に細分化されており，われわれが都市というタイトルで申請しても採択されるようになったし，石原先生のグループも「歴史」というタイトルでも採択されている。それぞれの学問の進展と関わって，専門分野が非常に細分化された調査に変わってきているのではないか，と私は受けとめている。それだけに，今度まとめ

る段階では，地理学全体のなかでどう位置づけるかという問題は，難しくなっているように思われる。1960～70年代には，海外調査によって得た情報そのものがすべて新鮮であったが，そのような時代はもう終わった。今日では，それから先のプラス・アルファを付け加えるために，もう一ひねり二ひねりしないといけない段階に来ているのではないかと思う。

岡橋：中山先生が提起された2つの問題について，ともに答えていただいたが，タイトルの問題については，寺阪先生のグループが地理学的研究にこだわるのは，申請をいかに採択してもらうかという戦略的な狙いがかなりあるように思われた。その意味では，中山先生の狙いとはずいぶん違っている。むろん，それから結果としてどのような作用をするのかは別であるが。その意味でこの問題は，今後検討する課題であるとは思う。われわれが地理学者としてどれぐらいの仕事をしているのかは，あまり外に見えないところがあるので，それをもっと見えやすくするために「地理学」というタイトルを出していくのは1つの方法である。そしてもう1つ，今日，高橋先生からの指摘があったように，(タイトルはどうであれ) それをネットワーク化して発信していく方法を考える必要がある。地理学では海外調査でこういうことをやって成果をあげている，ということを積極的にまとめて発信していくことが大切だ。

中山先生，このタイトルの問題について，もう少しコメントはありませんか。

中山：今の岡橋先生が言われた後者の「地理学から外への発信」は，確かにタイトルに「地理」という言葉を入れる以外のやり方でも可能である。すなわち，内容において，地理学的視点はこうであるということに努力していけば，結果的には同じことが目指せるように思う。

高橋伸夫(筑波大学地球科学系)：テーマについて私が発言したのは，地理学的なものを最終的にネットワークに乗せたいということだが，戦略的には寺阪先生とは逆だ。われわれの場合には，「地理学的研究」とつけていたら他分野の先生の賛同が得られなかったので，戦略上「地理学的研究」を削除した。もちろん，内容は地理学そのものである。先ほど言ったように，カウンターパートの歴史地理学者のピットにしても，都市計画研究所の所長になった前歴がある。つまり，彼らは，歴史地理学者であり文化地理学者であるが，同時に将来指向もできるし都市計画もわかる人たちである。寺阪先生がいわれるように，審査員には確かに地理学者がいないので，地理学をアピールするというのは正攻法だと思う。た

だし，戦略という言葉を使うのであれば，「地理学」という言葉を削除し，問題解決型のアップ・トゥ・デートなタイトルにし，中身をみれば地理学であるというものにするのも1つの方法だ。どちらを選ぶかはそのチームの主体性というか考え方だと思う。

岡橋：やはりこの問題は，戦略としてはなかなか一概に言えないところがあるように思う。確かに海外調査の審査員には地理学者は少なく，ほとんどいないといってもよい。それをどのようにとらえてタイトルで勝負するかというのは，なかなか難しい。ただ私の感想をいえば，「地理学的研究」をつけなくても，地理的な独自性をもったキーワードを入れることを皆さん努力されているように思う。例えば地域構造であったり，大都市圏であったり，そのような地理学以外の分野では使用しないようなキーワードが入っていれば，ある程度有効な作用をするのではないかと思う。その点で，このような意見を参考にしていただいて，今後の皆さんの調査申請その他に役立てていただきたいと思う。

なかなか荷が重いのは中山先生の2番目の問題だが，この話は出てくるだろうと予想していた。当時の中山先生の論文には，大岩川先生と応地先生の2人の意見の相違として書かれている。つまり，ある地域の固有性を追求していき，地域社会の視点から説明し記述して地誌の完成を目指すべきであるという地誌学派的な見方に対して，地域研究とは，例えば，ある地域について農業をある地域に即して調査することでよいのではないかという見方である。先ほどの寺阪先生の「研究テーマの細分化」という話では，今日ではどちらかといえば後者のほうが優ってきているのではないかと思われる。そしてまた，指摘があったように，現在はこのような議論がなされた段階とはまた違ってきている。海外地域研究には相当の蓄積があって，その意味では観念的な，一部の人たちの議論に終わってはいけない状況に来ていると思う。

そのような意味で，この話をもう少し進めたいと思う。中里先生，いかがでしょうか。現地に密着して活躍しておられるフィールドワーカーとして，その辺りはいかがですか。

中里亜夫(福岡教育大学教育学部)：いろんな機会をいただいてインドとかインドネシアを歩いているが，地理の研究者と一緒にやる場合と，農学あるいは社会科学などの方々と一緒に調査する場合など，さまざまなケースがある。最近では教育関係の人達と一緒に調査しているが，問題なのは，地理学というよりも私個人の立場というか姿勢，研究のあり方である。特に社会科学の方々と一緒に研究する場合，私には，例えばインドならインド，インドネシアならインドネシアの国の事情が大前提としてある。例えば独立間もない国が，どのような方向に進もうとしているのかである。インドにはインドの国の進め方が存在す

る。私たちは日本人なんだが，少なくともそういったことを念頭に置きながら，地域の変化とか，いろんな施策が具体的な地域においてどう動いていくのかということを，ある程度判断し，一定の価値を与えていくことになるだろう。その場合に，われわれの研究がどこを指向したものであるのかが問題になる。したがって，地理学独自という言い方はよくわからないが，地理学であろうが社会学であろうが，少なくとも研究の方向性がそれぞれの研究にはあるように思う。その際に，地理という形でくくれるようなものがあるのかどうかは，私にはわからない。

ただ，私の簡単な感想を言うと，社会科学系の人と一緒に調査すると，彼らは，例えばインドならインドの矛盾というか，そこにある構造的なものを引き出してくる。だから逆にいうと，「暗いインド」を描くことが非常に強く出る。ところが，私が描くと，インドは非常に明るくなる。それは，われわれの研究成果は最終的に教育に利用されるのではないかと私は思っているからである。私たちの研究成果は，ただ研究者のなかで終わるわけではない。私たちの研究が一体どのように使われるのかというと，国際理解などの教育分野に使われうる可能性があるのではないか。したがって，研究成果が何に利用されるかを考えた場合，いくら矛盾がどうだと言っても，それが教育の場でうまく利用されているであろうか。それが現実にインド観であるとか，種々の意味でのステレオタイプを作り上げてきていると私は思う。逆にいえば，そのようなステレオタイプを壊すような研究を考えたい。だから，ある国の良い面，われわれからみて非常によくやっていると考えられる面に，ひとつの研究の方向性を見いだそうとするのが，私のやり方だ。しかし，それが地理かどうかということになると，それは少し違うと思う。

岡橋：なるほど。これは非常に重要な点で，地理学の体系の問題とは別個に，個々の研究者の立場が海外地域研究では非常に問われるということであろう。これはわれわれが海外調査をしたときに日々思うことである。その成果がどこへいくのかについては，自分たちの意識的な方向もあるし，意識せざる方向もあると思う。これは研究者としての問題だと思うが，このことはしっかりとふまえておく必要があろう。

高橋：中里先生のご意見に対する支援とともに，もう少し説明を加えさせていただきたいと思う。中里先生は「教育が究極だ」と言われたが，その教育を少し広めていただきたいと思う。今聞いていると何か学校教育のみのような感じがするが，社会教育や他の学科に対する教育も重要であろう。われわれ自身が考えなければいけないのは，もうそろそろ，われわれが現地に行って「世界地誌」を書かなければいけない時代になってきたのではな

いか，ということである。フランスの『世界地誌』の話をすると，ロジェ＝ブリュネというモンペリエ大学の著名な地理学者が，ミッテランの後押しによって社会党政権の国家事業として十何年も構想をねって，10巻にわたる『世界地誌』を発行しつつある。われわれは，個々に研究した結果を個々にネットワーク化すべきだと言ったが，究極的には，20巻でも30巻でもよいから，国家事業として全力を注入し，その結果，社会教育や他の学問に対して「これだ」というものができれば，われわれは任務を果たしたといえるのではないか。ご存じのとおり，エリートとはフランス語だが，フランスはエリートの社会だ。今はみんながピットを一生懸命持ち上げて有力者にしようとしているが，ピエール＝ジョルジュも学士院会員でもある。また，ブラーシュを知らないフランス人はおらず，歴史学者でもブラーシュの著書を引用する。それらの人たちが大著を出し，現在では国家事業として『世界地誌』を作成している。他国の例をみても，他の学問に対するアピールというか社会教育が必要だと思う。

岡橋：中里先生の意見をさらに展開されて，「世界地誌」をわれわれはまとめる必要があるのではないか，というご意見であった。これはフランスではすでにやられていることだが，これはわれわれの意外な盲点である。そのような偉大な展望をもって研究している人は，日本の地理学者には少ないように思える。私自身自戒を込めて言うが，最終的にどこまで行けばよいかをあまり考えずに，どちらかというとタコ壺に塡ったかたちで研究を進めており，目下の問題がある程度理解できれば満足するという，ほどほどの満足感をもって研究している。だが，地理学の研究はそれではいけない，ということであった。「世界地誌」というかたちで発表しないと，海外地域研究を蓄積しても無意味ではないか，というご指摘であったと思う。これを具体的にどのように詰めていくべきかは本当に大きな課題であるが，それは後に残しておき，藤原先生，いかがですか。

藤原健藏(広島経済大学経済学部)：先ほどの中里先生の発言については，私も同感である。というのは，われわれはインドのかなり細かいフィールド調査をしたが，それは単なる事例にすぎないというような批判も確かにあった。しかし，われわれの姿勢は，現在のインドの状況を自分たちの目を通して正確に伝えるというこの１点にあった。その点では，例えばインド社会についての歴史学や社会学の研究についてもある程度頭には入れていたが，別な面では頭を真空にして現実に対峙した。そうすることによって，インド農村の現状は悲惨さが目につくが，ある面では村人たちの明るさが確認できる。現実を丁寧に紹介することが大切だ。

例えば「緑の革命」について，当時の日本の研究者は，そのマイナス面だけで徹底的に叩いて，緑の革命を全面否定しようとしていた。それは先進国の学者の眼からの批判だったかもしれない。だが，果たしてそれが正しかったのか。地理学者がフィールド調査を行う場合にはまず現実をきちんとおさえて，それに対してどのようにアプローチするかが大切だ。それは方法論の問題になるが，地理学者の姿勢の問題でもある。

もう1つは，最初に岡橋先生が言ったような，特定地域の研究に終わるのか，普遍性を求めるのかといった問題だ。これについては，私も先に話したが，地域のスケールが重要となる。例えばデカン高原の一部では普遍であるが，インド全体には普遍化できないことがある。地理学の研究，特に地域研究には絶えずスケールを念頭において行うべきだ。そうしないと，特定地域の個別事例と普遍性の問題は平行線を辿ることになる。それでは，地誌をどのスケールで研究すればよいのか。高校の地理の教科書などでは「現代世界の理解」が取りあげられるが，そのときには，国ごとのスケールから，現代の世界を視野に入れておかねばならない。そうした場合に，先ほどの個別と普遍の問題が出てくる。これは民族学や文化人類学でも盛んに議論されている問題だ。「性急に普遍的共通原理を求める欲求と地域研究とはむしろ対立する」と京都大学東南アジア研究センターの坪内良博氏も言っている。それは地理学固有の悩みではなく，地域研究自体が抱えている問題だと思う。繰り返すことになるが，標本調査は個別事例に終わるのではなく，ある範囲に適用され，当該地域の地誌につながる。そうして求めた地域の論理は，地方，国，さらに世界の地誌へと発展する。普遍化には段階があると思っている。

また，先ほど高橋先生が言われた「世界地誌」の発想には賛成である。先生も関係された朝日百科の『世界の地理』は，その前のシリーズの『世界の食べ物』が僅か3万部しか売れず，出版社でこの百科の企画をやめようという話になったときに，地理の好きな担当者がこれが最後だからといって『世界の地理』を出すことになった。ところが，発刊したとたん，35万部が一気に売れ，その後も12～13万部が売れたという。高校の先生たちの定期購読が多かったそうだ。あれは，国や地域の特性が明確に出されている。やり方によっては，地誌はそんなに捨てたものではない。要はわれわれのやり方しだい，取り組みしだいではないかと思う。

岡橋：確かに，今までに「世界地誌」の類が全くなかったわけではない。われわれにも「世界地誌」の方向性を考えていく必要が大いにあると思われる。また，普遍と固有についても，藤原先生からスケールの問題が重要だろうとの指摘があった。これには，私個人としては少し感想があり，違った意見をもっている。それは，スケールの問題であると同時に，

地域のどのレベルをみていくのかという問題が，非常に重要ではないかと思う。経済現象は非常に普遍的な性格をもっており，世界がシステム化されているが，これが社会・文化と下りていくにつれて固有性が強まってくる。すなわち，インドであればヒンドゥー文化という非常に根強いものをもっており，資本主義経済がさらに発展してもヒンドゥー文化がたやすくひっくり返るとは思えないし，普遍化してしまうとも思えない。その点では，どのレベルでその地域をみていくのかということと同時に，何を目指すのかということは，相互にリンクしていると思う。おそらく経済地理学者と文化地理学者とでは，調査方法や調査目的が違っているのではないか，あるいは学問分野によっても違ってくるのではないかと思う。これは結論を得ているわけではなく，感想として述べさせていただく。

石原　潤（京都大学文学研究科）：私の発表の結論では，地理学的な視点・方法の有効性について述べたが，それと地誌学との関わりについては言及しなかったので，少し補足しておきたい。私の関心は，中心地論の亜流のようなマーケットの理論(スキナーやスタイン)にある。それに則った研究が，地理学者の間では1970年代頃に非常に盛んに行われた。しかし，インド亜大陸や中国大陸のような大地域レベルで詳細に行った研究は少ないので，私はそれを長らく追求してきた。問題関心からいえば非常に系統地理学的な，しかも寺阪先生がいみじくも言われたように，非常に細分化された専門分野の話である。しかし私は，中国・インドでの研究成果が，世界の発展途上国全体にある程度通用するだろうという意識をもっている一方で，インドや中国の大きな文明圏ごとの特殊性があるだろうということも，一方では意識して研究してきた。そして，具体的にさまざまなかたちでプロジェクト班を組むと，地理学者のなかでも違うテーマを追いかけている人が入ってくる。もちろん他分野の人も参入してくる。したがって，私自身の関心も知識も非常に広いバックグラウンドをもつようになったし，もたざるをえなくなった。おかげで，私自身，現在，立命館大学で「中国地誌」という授業を行っているし，昨年は京都大学で「中国地域研究」という大学院生相手の特殊講義を行った。また以前には「インド地誌」の授業もしたことがあり，ゆくゆくは「インド亜大陸地誌」や「中国大陸地誌」を書きたいと思っている。その地誌のあり方は，朝日百科のようなトピック的な形になるのか，あるいは先ほど言ったある種の地域構造論みたいなものになるのかわからないが，いずれにせよ地名辞典的な地誌にはならないと思う。また，非常に気になっているのは，エリアスタディの人たちも，Area Studiesがどうあるべきかと，われわれが地誌について語るのと同じような議論をしている。例えば京都大学の東南アジア研究センターから滋賀県立大学に移られた高谷好一先生は「世界単位」というような概念を出しておられる（地誌研年報５号 参照)。そのな

かでは，かなり大胆なことが書かれており，こんなことまでいえるのかというところもある。しかし発想としては，ある意味では非常に地理学的な生態学的単位を基本にしながら，そこに統一した世界観とか価値観をもつ地域を世界単位と同定し，世界・地球を覆う一つの地域区分を行っている。そのような発想にわれわれがどう対抗していくのか，という問題も問われているように思われる。

岡橋：石原先生には，これまでの研究の成果や流れをふまえながら，地誌がどう位置づけられるのかについて述べていただいた。地誌が最初から目的ではなくて，最終的に地誌が成果として成り立つのではないかという気持ちになった。システマティックにただ並べれば地誌になるという時代は終わり，地域との長い付き合いのなかで，相当の蓄積があり，またその人のその地域への強い愛着があって，書かれるのが地誌であろうと考えると，地誌の執筆はかなり難しいように思う。ただ，海外の地理学者のなかには，そのような地誌を書いている人がおり，そのいくつかは他の学問分野にもかなり重視されている。実際にそのような成果は認めなければならないと思う。その意味では，世界地理と同時に，個々の地域についても地誌が執筆されることが，非常に望ましいことであると思う。

戸祭由美夫(奈良女子大学文学部)：今日の諸先生方のお話をうかがい，特に広島大学は長い間インド研究をしておられるので，私の希望を述べたい。先生方のレジュメをみると，日本語だけでなくて英語で書かれた報告がかなりある。これは非常に重要なことと思う。というのは，海外調査に限らず長い間地域調査をしていると，その成果を地域にも還元することが必要と思う。その場合に，世界に通用する英語で書くことは非常に重要である。それともう１つは，地理学という名前で科学研究費に採択されるとか，その名称がなかったほうがよいとかいうよりも，地理学者が書くことによってどんなところで役立つことを示すことが必要だ。それは，その土地の人にとって役立つことであるとか，あるいは，その国や地域の地理学者にとって新しい見方を提供し，地理学界にインパクトを与えることが必要だと思う。それから，ロングスパンで研究している広島大学のインド研究などでは，地域政策的な面でのインパクトを与えることも必要ではなかろうか。つまり，その研究がどのようなインパクトを与えているのかが，長い研究の成果に対して問われるのではないか。地理学の世界でだけよくやっているというのでは済まない点があるのではないか。その点をも検討すれば，地理学が日本だけではなく世界的にも認められる契機になるのではないかと思う。

岡橋：確かに，研究成果がその土地の人にとって役立つことが望ましい，といえる。ただ，寺阪先生の指摘にもあったが，相手国では応用的研究の期待がかなり大きい。一方，日本人側ではもっと基礎的なところに興味があるという，関心のズレに関する指摘もあるようだ。この点について，さらに意見はないか。

藤原：私どもの南インド調査の報告書を作成したとき，意識的に力を入れたのが地図である。いろんな表現方法の地図を多く作成したが，これが発表当時，インドの研究者に大きな刺激を与えたという。それ以来，表現を工夫した地図や詳細な地図が多くなった。昨年も南インド報告の3部作をコンパクトにまとめて再版してくれないかという話があった。そのような努力は大切ではないかと思う。

岡橋：確かに地図などは高い評価を受けるだろうし，当該国で再版される例もあるようだ。そのことが，当該国にさらに大きなインパクトを与える。手に入れにくい報告書よりも，現地で購入できる出版物にすることは，大変な仕事ではあるが，1つの方法だと思う。

ところで，先ほどいわれた「他分野との関係」も課題として残されているように思われる。この点について，村上先生は国際協力研究科に所属され，現在も科学研究費の問題でずいぶん苦労されているようだが，われわれの参考になることがあれば教えていただきたい。

村上　誠（広島大学国際協力研究科）：今まで話をお聞きして，皆さんが「海外地域研究」と「海外地域調査」とを，場合に応じて都合よく混同して使っているのに気づく。いうまでもないが，「地域研究」は地理学固有の言葉ではない。「地域調査」もあるいはそうかもしれないが，われわれは安易に両者を混同すべきではないと思う。地誌学は，地理学に古くからある学問分野であるが，今日では，最も基本的なことにおいてもコンセンサスを得るのは難しいと思う。今日ご発表の先生方はそれぞれ地誌をテーマにしておられるが，各先生の間で，違った解釈がなされているような気がする。それを一致させねばならないとは思わないが，それぞれの差異については知っておかねばならないと思う。

次に，われわれが海外の調査で取りあげる「場」について問題にしたい。先生方は，それについてさまざまな表現をされており，苦心の跡がうかがえる。石原先生は「典型的な場」という形でこれを取りあげ，藤原先生は「標本地域」と表現した。また別の方は，「特定地域」と表現した。これはいかにして調査対象地域を選ぶかという点で，非常に重要な意味をもっているように思う。調査事例の普遍化か，特殊性の追求か，目的の基本に関わ

るものと思われる。私にはそれ以上のことは言えないが，ただ，いくつかの座標軸がそこに存在することは間違いない。

岡橋：地誌に対するコンセンサスの問題や取りあげる「場」や「地域」の概念の問題について指摘していただいた。地理学は地域を扱うのに地域が曖昧なままでは，確かに不都合な点が多いかと思う。

澤　宗則(神戸大学発達科学部)：地理学の他分野への貢献について，地理学による地誌研究の価値は一体どこにあるのか，そのセールスポイントは他分野の人にとってどんな意味があるのかを考えた場合に，それは2つあると思う。まず，岡橋先生が示された表1によると，地理学関係の国際学術研究は開発途上国にきわめて多く集中していることがわかる。これは，地理学者はもとより他分野の研究者も途上国に関心があることを示唆している。そのことから考えると，学問を志す者にとっては「未知なるところ」について関心が強いといえる。したがって，他分野の人がまだ潜り込んでいない地域を「このような地域である」と紹介することは，かなり価値があるのではないか。つまり，「未知の地域を知ること」に地誌研究の1つの価値があり，それは他分野にも貢献することになるというのが第1点である。

2点目は，石原先生の発表のなかで，地域構造や空間性が地理学をアピールする1つの点だと指摘されたが，地域性や空間構造のメカニズムは全世界同じではない。例えばインドにはヒンドゥー社会のなかで普遍的な変化がみられるが，その地域ならではのユニークネスもあるのではないか。つまり，普遍性のなかにユニークネスがあるのではないか。それはそれぞれの文化によって異なるものだ。そのユニークネスを示すことに，地理学における地誌研究の一つの価値があるのではないかと思う。

岡橋：他分野の人にとっての地誌学の価値について，2つの点を指摘していただいた。1つは「未知（の地域）の知」である。本来地誌が成り立ったのはそのような部分によるところが大きいと思う。2つ目は，地域構造や空間性は地理学独自のものであるが，その地域ならではのユニークネスを追求する必要があるとの指摘であった。確かに，地域構造をいかに理解するかは地理学の最も重要な問題であろう。先ほど村上先生が指摘された地誌の問題と同じで，これにはコンセンサスが欠けており，そこに1つの問題点があると思う。海外においても地域構造概念が有効だとの指摘はそのとおりかと思う。

寺阪：今の意見について１つだけ言っておきたい。われわれが先進諸国の地理学的な調査を行う場合に，何を新たに付け加えられるのか，例えばフランスやドイツ，イギリスへ行ってできることは何かといえば，そう多くはないと思う。その意味では，途上国のほうが既存の研究蓄積は少ないので，新たにプラスするものを比較的簡単に ―実際には簡単にでもないけれども― 見いだすことができ，学問全体にとって貢献することが多いだろう。先進諸国に対する調査でいえば，オーギュスタン＝ベルク氏やプズー氏などが日本のことを書いているが，そのレベルに到達するのは，何十年という研究の蓄積によるか，もしくはそこに住みつかないと達成されないだろうと思われる。１カ月程度や長くて半年の調査の繰り返しでは，あのレベルの調査は先進諸国に対してできないだろう。それに対して，途上国の場合はまだまだ残されている課題が多いので，海外調査の採択数にも影響しているのではないかと私は感じる。

藤原：私の発表の図２で，地理学者がフィールドにどのように近づいているかを示した。これは，先ほどの「海外地域研究」と「海外地域調査」の区別にも若干応えると思うが，文献研究によっても，海外地域の研究を行い，地誌を書くことはできるし，現に書いている人もある。だが，その地域やその現場により近づくことによって，問題の核心をよりリアルに表現できるはずだ。フィールドに近いだけでは駄目ということもあるが…。図のタイプＩは系統地理学の取り組み方である。確かに，ある特定テーマの問題解決にはなるが，見方が偏っているから地誌にはならない。反面，前回のシンポジウムでも話題になっているが，地理学者は行っただけで地誌が書けると思っている人が多すぎると思う。私も自戒の念を込めて言うが，きちんと意識をもって近づかないと，実体が把握できないし，地誌も書けないはずだ。地誌を堕落させている原因だと思う。

岡橋：ある場所に近づくことの効果に加えて，ただ近づくだけではいけない，というご指摘をいただいた。ある地域を研究する地理学者にとっては，認識論の問題に関わる重要な問題かと思う。海外地域研究においても重要な点ではないかと思われる。今日この問題を深めていく時間はないが，皆さん各自で，この点をさらに検討いただければと思う。最後に，総合地誌研究資料センターのセンター長である森川先生は，これまでの研究をふまえて実際にドイツという１つの国の地誌を書いている。これは地誌という意識をもって書かれたのではないかと思うが，それと関連づけながら，今日の総括的なコメントをいただきたい。

森川　洋(広島大学総合地誌研究資料センター長)：今日は地理学における海外調査はいかにあるべきかという問題について，実のある議論が行われたように思う。特に，地理学独自の研究は何かといった問題については，私も関心を持っていたが，これについては石原先生が指摘され，さらには藤原先生・寺阪先生が追加され補足された。私は，海外調査と地誌学との関係といった問題を考えていたが，その点について先生方のお考えを，まとめて発表していただいたと思う。最終的には，地理学・地誌学の研究は空間構造・地域構造にあるべきだと言われたが，その具体的内容について皆さんの考えはそれぞれ異なるという岡橋先生の発言だった。私としては，地域の骨格は集落構造から形成されており，それに経済や社会・文化が関係しあっているという点からみて，シモンズ (Simmons, J. W.) 氏がいったように，都市システム研究が地誌にとって重要ではないかと思うが，構想が十分にまとまっているわけではない。

時間の都合もあり，私のドイツ研究のことについては省略したい。また，総括的なコメントを述べる力もない。岡橋先生のまとめのなかの１つ目の実際的な問題については，先生方の発表のなかでかなり指摘されてはいたものの，十分には検討ができなかったのは，少し残念に思う。

このシンポジウムの成果は地誌研年報７号に収録し，広島からこのような問題について発信させていただくし，高橋先生がいわれたネットワーク化についても検討していきたい。その点では，本日のシンポジウムは非常に実りあるものではなかったかと思う。現在各研究グループのチーフとして活躍しておられる第一線の方々が，ご自身の豊かな経験をふまえて発表をしていただいたことにお礼を申し上げたい。

(広島大学総合地誌研究資料センター　森川　洋・佐藤崇徳　記)